

母親のあり方と不登校

東京都スクールカウンセラー（臨床心理士） 金屋光彦

全 国小中学校での不登校数が減少した。文部科学省によれば、2008年度の長期欠席者数は計12万6,805人、内訳では小学校2万2,652人（前年比1,275人減、5.3%減）、中学校13万5,815人（前年比1,212人減、1.2%減）で、特に小学校での減少が目立つ。

東京都は臨床心理士の資格を持つスクールカウンセラー（以下SC）を、2008年度から小学校へ配置することを開始した。私もその初代SCとして区立K小学校へ赴任し勤務している。

このK校は、近くの児童養護施設M学園からの登校児童を数多く抱え、対応が難しい子どもも少なくない。この学校の素晴らしいところは、「いろんな子がいていいんだ」という個性を尊重する校風と、児童一人一人にきちんと向き合い、粘り強く教え育てる先生方の一貫性に富んだ姿勢である。

小学校は社会化促進の時期で、ルールや役割や他者に自らを合わせようとする心の自律性の育成が最も望まれる。教育という施しは、手を抜こうと思えば抜ける一方、やり出したら果てしない時間と労力が必要だが、K校の先生方はそれらを惜しみなく子ども達に注ぎ込む。家族以外の他者との信頼感を培い、子どもの間で起こる問題や葛藤にクラス全体の問題として向き合い、その問題解決の引き出しを一つ一つ獲得しながら、心身とものびのび育っている。

このK校赴任時、低学年に1名、上級学年の2名が登校に困難を示していたが、今年度2学期になって不登校児童はゼロになった。不登校をなくす過程で思うことは、母親の存在の大きさである。不登校問題をはじめ、その子が学校でどう過ごせるかという学校でのあり方に、母親のあり方が色濃く反映する。学童期にあたる小学校では特にそうである。SCとして職務経験のある方々は、日々そのことを痛感しているであろう。

それを示唆する興味深い話がある。それは、ある学会での生後4カ月の幼児に関するシーンである。まず第一に、

A児と母親とのほほ笑みに満ちた母子交流シーンが映し出される。ところが、次の保育園での場面では、A児と保育士との関係が悪く、子どもはぐずってばかりいる。今度は、同じ園で別のB児が保育士と笑い合い、楽しく振る舞うシーンが出てくる。このA児とB児との違いはなぜか？母子関係、保育士の経験年数や育児熟練度はすべて同一だが、この園でのA児とB児の有り様の違いは、園へ預ける際の母親のあり方の違いによる。A児の母親は、4カ月で預けることに罪悪感を感じている上、園の対応に不信感を抱いたまま預けていた。一方B児の母親は、4カ月になれば預けてもよいと考え、少しも罪悪感を覚えていない。むしろ、別の女性と接する体験がある方が、より健全に育つと信じている。だから、保育園に預ける際も、十分な信頼感を抱いていた。B児も、母親の気持ちに同一化し、保育園はとても良いところだと感じて、楽しく積極的に過ごせていたのである。

この構造は、小中学校でもあてはまる。「学校や教師を信頼しよう」という保護者の態度が何より重要になる。母親が学校批判を子どもの面前でやると、子どもはその学校で適応しようと頑張る気持ちが著しく萎える。毎日遅れずに登校しルールや指示に従う、掃除や給食係等の役割行動を進んで行う、嫌いな級友とも折り合いをつけて協力し合う等、将来の長い職業生活を快適に送る力に繋がっていくこれらの力は、母親が学校や教師への安定した信頼を示せてはじめて、自分の中に養おうとする覚悟や心構えが子どもの中にも生まれてくるのである。

親も教師も「子どもが健全に育ってほしい」という願いは同じである。違いは、教師はそれを職業として行う。職業人は言い訳ができない。保護者や社会から信頼を得られる教育を施すのは使命である。保護者と教師とが協力連携し、一貫性を持って子どもと向き合うところに、子ども達の将来に繋がる成長が広がっていくのである。